命の尊さを胸に刻み、温かい心と強い心で生きていきたい
平和のありがたさを一人でも多くの人に伝えたい

沖津　秀平（14歳・長船町福岡）

僕は、瀬戸内市の国際貢献事業に参加し、カンボジアに行ってきました。

日本では、当たり前においしいご飯が食べられて、当たり前に安心して生活ができます。学校で勉強ができるのも当たり前です。この「当たり前」のありがたさは、カンボジアに行くまで、全く気付いていませんでした。

支援村の子どもたちと初めて会った時、僕は心の中で、「現地の子どもたちは不幸で、かわいそうな存在だ」と勝手に哀れんでいました。そんな気持ちの僕に、子どもたちは自分から近寄ってきて、怖がりもせず、瞳をキラキラさせて親しんでくれました。

カンボジアは発展途上国で、地雷などの戦争の爪あとが今もたくさん残り、決して平和な国ではないけれど、日本に負けない大自然や建築物、そして何よりも人間としての心の温かさがありました。

心優しい人たちが、厳しい生活環境の中で、精一杯生きている姿を見て、「現地の人たちのために自分がやれることを全力で頑張ってやろう！」と決意しました。

日本は寒い冬ですが、カンボジアの気温は30℃を超え、日差しがとても強く、ものすごく暑かったです。そんな暑さの中、頭のてっぺんから脳みそが飛び出しそうなくらいデコボコの道を、車で揺られること2時間。目的のバンデアスレイオオモノ村に到着。そこからさらに歩くこと20分。そこには、見渡す限りの大自然が広がっていました。

こんな炎天下の中で作業するのかと思うと、正直ぞっとしました。「サッカーで鍛えているから簡単にできる」と甘く考えていましたが、使い慣れないクワを使っての作業は、想像以上にきつかったです。それでも「橋を架けてあげたい！」という気持ちが強かったので、最後までやりぬくことができました。

市役所の人たちや、友達と力を合わせて、一生懸命働きました。カンボジアの言葉が分からない僕たちだったけど、現地の人たちと一つの目的に向かって頑張れたことは、とても大きな国際貢献になったと思います。

もくもくと作業して、ついに『瀬戸内橋』が完成しました。「この橋で、現地の人の生活が楽になる。現地の人が喜んでくれる」そう思うと、疲れたことよりも、達成感で胸がいっぱいになりました。誰かの役に立てるということは、とても気持ちが良かったです。

僕は今まで、好きなことをして、欲しいものが手に入ることが幸せだと思っていましたが、「貧しくても家族のつながりが強い。コンビニや立派な建物がなくても時間にゆとりがある。本物の笑顔がある。尊い命があって、その命を輝かせることができる」これがカンボジアで発見した新しい幸せです。

今回の国際貢献事業で感じた、命の尊さをしっかりと胸に刻み、これからも温かい心と強い心の両方を持って生きていきたいです。そして平和のありがたさを一人でも多くの人に伝えたいと思います。

最後に、僕が声を大にして言いたいこと。「日本の米はほんまにうまい！」

立派に完成した瀬戸内市支援井戸

水分を含んだ土は重い

世界遺産のアンコールワット

土が掘られヒューム管が埋められます

一緒に遊ぼうと手を取る子どもたち

一人でも多くの人に知ってほしい
本当に大切なことは何なのか

北村　彩華（19歳・長船町福岡）

私がカンボジアへ行って一番強く感じたのは、現地の人々の温かさでした。小さな子どもから大人まで、国籍の異なる私たちを満面の笑みで迎え入れてくれました。あんなに純粋で温かい笑顔は、日本ではなかなか見れないと思います。

エイズ村の見学をさせていただいた時に、エイズだと思われて何度も売られたという子どもがいました。その子どもがこの村へ保護されてからは、ある家族のところへ「本物の息子だと思って育てるように」と預けられたそうです。それからというもの、その家族に元々いた子どもは、その子を本物の兄弟であるかのように受け入れ、毎日手をつないで歩いているとのことでした。

周りを見ても、たくさんの子どもたちが手をつないだり、まだ小さな子どもが赤ちゃんを抱っこしていたりと、兄弟愛で溢れていました。そして大人も子どももとても幸せそうに微笑むのです。

その笑顔を見て、私はなぜ経済的にも物資にも恵まれているはずの日本人は日々ストレス社会と言われる中で生き、嘆いていて、発展途上で自給自足の生活をしているカンボジアの人々はこんなにも幸せそうに笑っているのだろうと思いました。

カンボジアの人々は、普段私たちが忘れてしまっていることを大切にしています。それは兄弟愛と家族愛、そして相手に対する素直な気持ちです。

村の子どもや大人たちはみな日本語を勉強していたので会話ができ、少し話をしただけで彼らの真っ直ぐさが伝ってきました。私が笑いかけると必ず満面の笑みを返してくれます。それを見るだけで、心が満たされる思いでした。

そして、ふと頭に浮かんだのは、もしこの国が日本のように発展してしまったら彼らの幸せを壊してしまい、もうこのような笑顔が見られなくなるのではないか、という不安でした。

確かに食べ物が手に入らないほど貧しかったら困りますし、今回のようなボランティアはもっと推進すべきだと思います。しかし、それ以上に、彼らの生活を変えてしまうほど周りが手を貸すのは良くないと思いました。

発展していない国は貧しくてかわいそうな国と思い込まれていますが、そのような考え方しかできない私たちが、本当は改めなければいけないと思います。

私は、初めてカンボジアに行って、この国がとても好きになりました。そして、日本のこと、自分自身のことを見つめ直すきっかけになりました。私は、この国はずっと温かい、この国のままであってほしいと思います。だからといって格差を放っておくわけにもいきません。とても難しい問題だと思います。でも、私はカンボジアの人々のことを一人でも多くの人に知ってほしいと思います。こんなにひたむきに生きている人々を間近で見て考えてほしいと思います。

本当に大切なことは、何かということを。